

埴谷雄高
思索的渴望の世界



聞き手

吉本隆明
秋山 駿

中央公論社

思索的渴望の世界

©1976

昭和51年 1月15日印刷 昭和51年 1月25日発行

検印廃止

著者代表 埴谷雄高 発行者 高 梨 茂 印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京2—34

思索的渴望の世界 目次

第一部 故郷なき青春

7

台湾における少年時代 9

母と姉のこと 18

“初恋”と“理想の女性” 26

哲学的想念の始まり 32

最初の映画体験 37

乱読の時代 42

演劇への耽溺 49

レーニンの『国家と革命』について 53

第二部 政治・戦争・文学

69

刑務所での読書 71

カントとデモノロギー 80

はじめての翻訳 88

開戦から敗戦まで 96

第三部 〈革命〉と〈意識〉

「近代文学」と「マチネー・ポエティック」 113

花田清輝とモリススト論争 126

「近代文学」の役割 136

『死霊』をめぐる 147

吉本・花田論争のこと 151

六〇年安保の頃 161

「情況への発言」をめぐる 166

『闇のなかの黒い馬』のこと 176

付録——伝記的補足 185

埴谷雄高年譜 226

埴谷雄高参考文献 251

秘められた自負：吉本隆明 260／気迫におどろいた話：秋山駿 262

後記：埴谷雄高 264

装幀 熊谷博人

思索的渴望の世界

第一部 故郷なき青春

台湾における少年時代

秋山 埴谷さんの少年時代に一番顕著に影響を与えたものというところ、ぼくはやっぱり台湾で生活されたことだと思えます。そしてそれが埴谷さんの現在のものの考え方や生活に対する態度、あるいはまた小説の中の風景描写となつて出てきていると思われるんですね。『影絵の世界』にも書いておられますが、あれは五歳ぐらいのところからはじまっているわけですけど、五歳以前の台湾といったようなものについて少し具体的に伺いたいと思いますが。

埴谷 ぼくはほかのひとと比べると変わっていて、いくぶん異端的というふうに見られていますけれど、その根拠はやはりぼくが台湾で生まれたということでしょうね。ぼくの実家は福島県の相馬郡小高町というところで、偶然、島尾敏雄君の郷里と同じところなんです。ぼくの祖父は相馬藩ですが、明治四年の廃藩置県、家禄奉還のとき田畑や山をもらつて百姓になった。いま相馬市となっている中村という町から小高へ、そのとき相馬藩の藩士が四軒移つて百姓をやるようになったのです。ところが、ぼくの祖父は一回も鋤を持たなかったんですね。百姓になるのが、よほどいやだったのか……、とにかくほかの三軒はちゃんと百姓になりきったのですが、ぼくの祖

父はいっぺんも鋤を握らなかったで、たちまち土地を抵当に取られて、ぼくのうちだけが没落したんです。

秋山 没落士族の典型だったわけですね。

埴谷 四軒来た侍達は土着様といって村では別格扱いを受けていたのですが、そのうちの一軒が没落して、みんな取られてしまったというので、もう村中の評判になったんですね。島尾君が「村だより」という文章にそのことを書いていますけどね。ぼくの父は孝行息子だったらしく、その土地を取り戻そうと思って、台湾へ行ったのです。その頃の台湾は熱帯地手当としての加俸があって、月給が倍くらいになったんですね。そして、親父は少しずつ土地や家を買って戻して、とうとう全部買い戻してしまっただけ。

ところが、またぼくが豊多摩刑務所に入っていたときに売っちゃったので、郷里でのぼくの評判はとても悪くなった。せっかく親父さんが買い戻したものを、アカになった息子がまた売っちゃったというんです。そういうわけで父が長いあいだ台湾にいたので、姉とぼくの二人とも台湾で生まれたんです。

ぼくは台湾の北部の台北と中部の台中のちょうど真ん中あたりになる、台湾でも一番気候のいい新竹というところで生まれたんです。ぼくが生まれたとき、親父は税務官吏だったのですが、その後製糖会社に移った。それで、ぼくはもの心つく頃は台湾の南部にいて、そのために日本人

らしい心情をほとんど植えつけられなかったのです。自然の風景は、川にしても、樹木にしても、とにかく日本とは全部違うのですね。中学二年のときに東京へ移って、はじめて郷里へ行ってみると、東北の風景と台湾の風景とはあまりに違うのですね。ぼく達のいた台湾で一般的な木は相思樹で、黄色い花が咲く頃、ぼく達がベタコと呼んでいた頭の白い小鳥がそこに群れ集ってくる。そのほかに風にゆっくりと葉をそよがせている椰子とか檳榔樹ピンランジュとか、また、ぼく達が台湾松と呼んでいた榕樹とかがありますね。それからイカダカズラとか、蛇木ジャギキとか、とにかく日本にない樹ばかりがある。そして最も自然な日本の情操にとって決定的と思われるのは、神社と寺がないことですね。郷里の小高に行ったらすぐ近所に野馬追いで有名な小高神社があるので、ほほう、これが日本人の魂の目に見えぬ寄りどころかと思いましたけれどね。

向うにはぼく達がただ廟と呼んでいた孔子廟があるんですが、これはまったく異国的なものです。どちらかといえば、馴れがたく薄気味悪い感覚がする。そして動物はどこを眺めても豚がいる。それに勿論、自然の風物ばかりでなく、季節感もまったく違っていますね。子供のとき遊びに行くのはまず川ですが、この川が内地の川みたいに安定していません。台湾の南部は夏が雨季で、ひとたび豪雨がやってくると、たちまち川の流れる場所が違ってしまっ、いままでこちらへ流れていたのが、それと違ったところを流れるようになってしまふ。そうした川の中でぼく達は一年中裸で泳いでいる。正月元旦からもう川へはいってゐるのですよ。南部はそれほど暖かい。

冬でも暑い日さえある。ぼく達の子供時代は、パンツやサルマタなどはかない時代ですから、男の子も女の子もみんな素っ裸です。そして、暑いものですから、たえず水を飲む。ところでその水の水质がよくないので、湯冷ましといって、いっぺん沸かしてからさましたものを卓上や台所に置いておき、たえずそれを飲む。つまり、裸で水ばかり飲んでい——いわば原始的生活ですね。こうしていると、日本人が本来持っているべき風土や季節の移り変りについての美的感覚とか自然な愛着の心情とか感受性とかが、ぼくの幼年時代に植えつけられる機会がなかったのですね。それから話とはびますけれど、当時台湾には七、八百万の台湾人（本島人といいました）がいたでしょうか、そこに二、三十万の日本人が支配者として威張っていて、決定的な力を持っていたのです。これはこれまで幾度も書いたたり喋ったりしていますが、たとえば人力車に乗りますね。その人力車をひいているのは台湾人ですが、それに乗る日本人はその車夫を人間扱いしないんです。まるで馬の尻を鞭で打つみたいに、人力車の上から足をのばして車夫の背中や首筋を蹴って、「左へ行け」「右へ行け」とか命ずる。そして、人力車から降りて二十銭と請求されると、いや、ここまでは十銭だと勝手にこっちで値段を決めて渡すんですね。「二十銭、二十銭」と言って車夫が追いかけてくると、「馬鹿野郎」と怒鳴って追っばらってしまうのです。

秋山　それですむんですか。

植谷　すませてしまうのです。子供ながらこうしたことには耐えられませんね。ぼくはほんとう

にぼく達日本人がいやになってしまった。世界中で日本人ほどいやなものはないと思います。死んでしまったのです。そして、その全般的日本人否定は自然に自己否定にもなるんですね。早く死んだほうがいいと思うようになってしまった。ぼくの自殺の観念は恐らく普通より非常に早いです。後年、運動へ入ってみると、それは必ずしも日本人だけの特性ではなく、植民地人に対する支配者の心情はみなそういうもので、イギリス人のインド支配などは日本人の差別感以上だということとがわかってきましたかね。けれども、幼年時代に植えつけられた日本人嫌悪の感じはどうにも抜けなくなってしまう、ぼくのニヒリズムの根拠も、ぼくの文学の現実離脱の傾向の根拠もここからでていますね。そして、現実そのものではなく、あるべき理想像を描きたがる根拠も、この台湾育ちから生まれた日本人嫌悪の感情に根ざしていますね。

秋山 いまのお話で埴谷さんの感受性の最初の型の根元がわかりましたが、埴谷さんにとっての故郷ふるさとというのはどこなんでしょうか。台湾は出てきませんか。

埴谷 ぼくの親父は製糖会社に入ってから工場から工場へと移ったのです。定着しないのですね。ぼくは台湾で生まれて、いままで述べたように非日本的感性のなかで育ったばかりでなく、親父が一個所に三、四年いると、ほかへ移ることになるので、ぼくには非定着者の思想といったものもはぐくまれてしまった。ヨーロッパにはコスモポリタンという言葉がありますけれども、ぼくの場合、そうしたものと違って、幾分似た言葉を使えば、ハイマートロスということになるで

しょうね。ドストエフスキーは、自分の郷土との関係を失った者は、自分の神すなわち自分の目的をも失うと『悪霊』のなかのシャートフに言わせていますが、ぼくも日本人の自然な憧憬の対象である日本の心情、その奥にある日本の神を失った感じですね。

ぼくは中学二年の時に東京へ帰ってきて、福島の小高の故郷へ夏休みにだけ行く。ぼくの親父は取られた土地屋敷を全部取り戻したことが喜びで、また得意だったのでしょうね。わざわざ石巻まで石を買いに行つて、その取り戻した山の墓地へ祖父の墓をたてたのです。それもふつうの墓じゃない。よく何々記念碑という大きい一枚ふうな石があるでしょう。そういう大きな記念碑風な墓を四軒の士族が共有している山の奥の墓地へたてました。その祖父の墓を見ると、封建時代からさらに古代へ、原始へと遡つてゆく遠い血の流れといったものをやっと感じる。また、ぼくのところは海へ近いところで、泳ぎにいたりすると、日本の情緒を感じる。けれどもこれらはあとからようやくつけ加えた部分なのですね。

秋山 ふつうは、そういう考え方の出てくる背景には少年期の出会った町の生活とか仲間同士の交際があると思うんですが、埴谷さんの場合それは台湾のところですか。それとも東京へ出てきてからでしょうか。

埴谷 ぼくの父がいた工場は、みな町から離れた田舎にあるのです。数百人の小さな日本人地帯を形成していて、そこにその工場だけの小学校がある。それで生徒の数はとても少ないんです。